

『栄光を求める祈り』ヨハネ17:1-5

17:1 これらのことを語り終えると、イエスは天を見あげて言われた、「父よ、時がきました。あなたの子があなたの栄光をあらわすように、子の栄光をあらわして下さい。

17:2 あなたは、子に賜わったすべての者に、永遠の命を授けさせるため、万民を支配する権威を子にお与えになったのですから。

17:3 永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがつかわされたイエス・キリストとを知ることであります。

17:4 わたしは、わたしにさせるためにお授けになったわざをなし遂げて、地上であなただけの栄光をあらわしました。

17:5 父よ、世が造られる前に、わたしがみそばで持っていた栄光で、今み前にわたしを輝かせて下さい。

●序論

イエスさまが十字架にかかる前夜に、イエス様になさったことやお教えくださったこと、そして、ここでは、イエスさまの祈りが丁寧に記されています。

のちの時代の人たちは、この17章の祈りを「大祭司の祈り」と呼ぶようになりました。大祭司というのは、神さまの前で民のためにとりなしをする人です。

イエスさまは、まずご自分のことを祈り、そして弟子たちのために祈り、さらに現代のわたしたちも含むすべてのクリスチャンのためにもとりなし祈っています。

これから順を追ってその祈りに耳を傾けてまいります。その中でその時の、弟子たちを見つめて語るイエス様のお姿を思っただければ感謝です。

そのまなざしは、弟子たちに。そしてわたしたちにも向けられているからです。

●本論

I. 十字架の時を見る祈り

17:1 これらのことを語り終えると、イエスは天を見あげて言われた、「父よ、時がきました。あなたの子があなたの栄光をあらわすように、子の栄光をあらわして下さい。

「父よ、時が来ました」と言われるイエスさま。

刻一刻と、その十字架の時が迫っていることを、意識していたことがわかります。

そしてイエスさまは言われました。「…子の栄光をあらわして下さい」と。

私たちは、「栄光」という言葉を聞くと、華やかな勝利のイメージを思い浮かべます。

しかし、イエスさまが願われた栄光は、そんなわたしたちの標準とは、まったく異なるものでした。

イエスさまは、これからどんな恥と苦しみを受けるかよくご存じでした。それがあの十字架です。

しかし、イエスさまはその道を歩むことこそが、父なる神の愛、そのみこころである、と受け止めていたのです。

そして、それこそご自身が受けるべき栄光である、と信じた。だから祈られたのです。

イエスさまは、あの十字架で、「あなたの子（つまりご自分が）、あなたの栄光をあらわした（十字架を受け入れた）ように、子の栄光（救いのご計画の成就）を現して下さい」と祈っておられるのです。

ヨハネは手紙の中でその愛をこう表現しています。

わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある。（1ヨハネ4:10）

そのすべてを通して、神のわたしたちへの愛がどれほど深いものか、また神の義がどれほど真実なものか、わたしたちに、そして世界に表している。

それをイエスさまは、御自分の「栄光」と語るのです。

教会の十字架は、それがどれだけ立派か…ということを指しているのではありません。むしろ十字架の苦難を示し、どれほど神の愛が真実であるかを、この世に示しているのです。

イエスさまが十字架の恥と苦しみをご自分の栄光と語られた。いや求められた。そのことを忘れない。それがわたしたちへのメッセージです。

Ⅱ. 永遠の命を見る祈り

17:2 あなたは、子に賜わったすべての者に、永遠の命を授けさせるため、万民を支配する権威を子にお与えになったのですから。

これもまた、わたしたちの標準とは異なることです。

十字架にかけられて殺されるような人が、永遠の命をくださる方となる、…しかし、それが聖書が語る福音の真実なのです。

それを理解するために必要なのは、「永遠の命とは何か？」を知ることです。

わたしたちの多くは、それを「天国に行くこと」だと考えます。

もちろん、それは間違いではありません。

ただイエスさまはそこに制限されないという「永遠の命」をここで語っているのです。

17:3 永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがつかわされたイエス・キリストとを知ることでもあります。

ここで「知る」と訳されている言葉は、原語では、単なる知識として「知る」ことではなく、また「ああ、わかった」という理解を言うものでもありません。

永遠の命とは、霊的にイエスさまを感じ、言葉を交わし、触れていただくような人格的な交わりの中で 体験的に知る、深く親しい関係に生きる、という意味です。

そこでは、イエスさまのまなざしを感じつつ生きる安心があるのです。

だから、それは、死んだ後に始まる命ではないと言えるのです。

今、この地上の歩みの中でも、聖霊の働きによって、そのいのちに生かされ、神と共に歩むことができるのです。

そして、やがてこの地上での命が終わるとき、完全なかたちで神との永遠の交わりに入る。その始まりを、実は、すでに今、私たちは与えられているのです。

Ⅲ. 栄光をみる祈り

：4-5「わたしは、わたしにさせるためにお授けになったわざをなし遂げて、地上であなたの栄光をあらわしました。父よ、世が造られる前に、わたしがみそばで持っていた栄光で、今み前にわたしを輝かせて下さい。」

イエスさまは、その苦しみを逃れたい…と祈ったわけではありません。

ここでイエスさまが目に向けているのは、神さまの愛の成就であり、わたしたちの救いの成就であり、その結果として、人が永遠のいのちを得る道が開かれることです。

ですから、まさに、イエスが求められた栄光と、私たちのいのちは、あの十字架によってはっきりと結ばれているのです。

十字架…、イエスさまは、その先にある栄光を見ておられたのです。いや十字架の恥と苦しみの先にある、わたしたちの罪の赦し、そして永遠の命の祝福を見ておられたということです。

更にそれを父なる神さまが、みこころとしてくださり、喜んでくださっているのです。それをイエスさまはご覧になって祈っておられるのです。

パウロはそのことをこう表現します。

ピリピ2:8-11

2:8-11（キリストは）おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで（神の御心に）従順であられた。それゆえに、神は彼を高く引き上げ、すべての名にまさる名を彼に賜わった。

それは、イエスの御名によって、天上のもの、地上のもの、地下のものなど、あらゆるものがひざをかがめ また、あらゆる舌が、「イエス・キリストは主である」と告白して、栄光を父なる神に帰するためである。

イエスさまは、十字架の道を歩みぬいてくださり、神からの栄光を受け取られました。

先ほど、「父よ、世が造られる前に、わたしがみそばで持っていた栄光で、今み前にわたしを輝かせて下さい。」と言われた、その”輝き”を、このイエスさまに見て、わたしたちもまた、今賛美しているのです。

さいごに)

「栄光」という言葉をどう受け止められたでしょうか？

イエスさまは、むやみやたらに苦しみを求めたものではありません。

ただ、わたしたちを愛する、父なる神さまの愛と心をひとつにして、わたしたちの救いと永遠の命のために、十字架の苦しみを味わいつくされた、それがイエスさまの、イエスさまにしか成しえない、贖いの業だったからです。

そのことを通して、わたしたちが自分の歩みを見直していくとき、イエスさまがわたしたちの人生にも、行くべき道を備えておられる、ことに気づくことはないでしょうか。

神さまはわたしたちをそれぞれの人生の祝福と使命へと導いてくださっている。それはだれも替わってもらうことのできない道だと気づかされるのです。

そこで神さまを見上げて祈ることです。

「天の父なる神さま。わたしに与えられているこの時、この問題の中で、あなたの導きと祝福を求めます。どうか、わたしを聖霊によって導いてください。わたしのすべての信仰の言葉と行いを通して、あなたの栄光を現して下さい」。

というふうに。

神さまは、すでにわたしたちに、永遠の命を与えてくださっています。だから、どんな時、どんな状況、どんな場所でも、主に心を向けて祈って欲しいのです。どうかわたしにあなたの栄光を見せてくださいと。

そう祈ることのできる幸いな命の世界にわたしたちは生かしていただいているのです。